



156号

2010/9/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp



「ネパールの山の町・タンセンの子ども」

撮影:今村 旭(ネパール・ミカの会)

‘わんりい’ 156号の主な目次

北京雑感(47)「中国」は健在なり2

私の調べた四字熟語(45)「意気揚揚」.....3

媛媛讲故事(26)「八仙の伝説VI・何仙姑」.....4

土の香りのモダンアート・農民画(12)「伝説の桃」...5

フィールドノートの走り書き(3)毛おじさん②6

松本杏花さんの俳句集・「千里同風」より9

【活動報告】ビデオ上映「ヤオトンの生活」とお話 ...9

四姑娘山山麓に蘭の花を求めて10

スリランカ紹介(41)「大学野球選抜チームの来日」...12

アジアを読む(69)「魔女の1ダース～正義と常識…」...13

私の四川省 一人旅(38) 亜丁2414

アフリカとの出会い(45)「スクマウィキな毎日」...17

映画「私の叙情的な時代」上映に寄せて18

‘わんりい’ 掲示板19・20

【表紙写真説明】

ヒマラヤ山脈とタライ平原の間に位置するタンセンは、標高は1,350mの、一年を通して暑すぎず寒さもさほどでない快適な町です。

パルパ地方の中心的な古都で歴史があり、商業が盛んでネパールとしては比較的に豊かなところです。この可愛い、明るい瞳の先にネパールの安定した社会が来て国が発展し、青年と成長した彼等が活躍する姿を見たいと楽しみに思います。

(今村旭)



【お知らせ】「中国語で歌おう!会」は、講師・趙鳳英さんが、9月より、中国四川省成都市にある四川音楽学院声楽科で教鞭を取られることになり、当分休会になりました。今後は、折々の来日の機会に講座を開催の予定です。

今年は、例年になく厳しい暑さが続いています。北京では、古老が「立秋まえの10日ほどが一年で一番暑い」と言い習わし、暮らしの中で実感したものでした。その「一番暑い時期」に、中国陝西省延安付近の、極めつけの乾燥地帯・陝北と呼ばれる黄土高原地方に行ってきた。この旅については、わんりい10月号の誌面でご報告しようと思いましたが、今月は、この旅の一番の印象である「中国」はやっぱり「中国」だったという事実をお話します。

大きく立派に完成した北京首都空港に到着して中国の変化を実感し、タクシー乗り場では、改悪とも取れる変更にも遭遇して、「中国は変わった」と感じましたが、その夜、「中国は不変」という事実にとっぷりつき合わされました。

今回は、夜行列車に乗ることも旅の目的の一つでした。以前、北京から長沙まで、夜行寝台車で独り旅をした時、コンパートメントの寝台にはカーテンも無く、知らない人の中に独りだけいると、なまじコンパートメントであることで非常に落ち着かない気持ちになり、独り旅の時は硬臥(カーテンはなく通路側がオープンになっている3段ベッド)の方が良いと思ったものでしたが、この度は4人なのでコンパートメントを独占出来、初めて快適な夜行列車の旅が出来ると期待しました。

列車はT43、21:36北京西駅発、翌日13:24延安着なので、19:00頃タクシーで北京西駅に行きました。北京西駅の相変らず人と車でごった返している中を縫うようにして、でこぼこの地面にスーツケースを転がしながら、柵の隙間に設けられた改札所を通りました。この改札口は臨時のもので、移動式フェンスで駅の正式な入り口を取り囲み、発車時刻が3時間以内の切符を持っている人だけを通していました。その改札口を通して、駅の正式入り口で荷物の安全検査を受け、やっと駅構内に入れました。そこも人が一杯でしたが、駅前の喧騒から逃れて「やれやれ」と思える空間でした。

天井から吊り下げられた大きなボードで、我々の列車の待合室を捜しました。出発時間の21:36で捜しても、行き先の延安で捜しても該当する列車が見当たりません。ドキドキしながら、更に列車番号で捜すと、表の後ろの方にやっと見つけました。ところがそれは何と、出発時間が23:30、行き先は西安となっているではありませんか。

動悸が激しくなり、汗ばんだ手の中にある切符の列車番号と時間・行き先を何度も何度も確かめましたが、番号は間違いありません。安全検査後の乗客を捌いている係員に訊こうとしましたが、完全に無視されてしまいました。仕方が無いので、とりあえず指定された待合室に行ってみようと駅構内を移動しました。両側に待合室があり、コンコースのような広い通路ですが、待合室から溢れた人達

が並んで腰を下ろしているので、実際に通れるところは狭く、床面が平らなのだけが救いと言う状態で目指す待合室へ向かいました。

ところが、この待合室にも何の情報も無く、訊ねる係員もいないのです。情報を得るために、荷物を置いて、また通路に出ましたが、そこにも係員の姿は全くありません。キョロキョロしているうちに、入り口近くでやっとインフォメーションデスクを見つけました。若い女性が独りで対応しており、しかもこの女性は時々後ろの部屋に引っ込んでしまうので、カウンターが無人になることも間々ありました。

問合せの人が引きも切らない中、私も頑張って、切符を見せながら「21:36発の予定だが」と訊くと、「その列車は遅れている」との返事、「何故遅れるのか?」「分からない」、「西安から延安まではいけないのか?」、「分からない」。何を訊いても「分からない」の連発でしたが、かなり粘って分かったことは、「西安からの到着が遅れたので、折り返しの列車が遅れた」という事実だけで、西安から先がどうなるかは、この女性も本当に分からないようでした。

この時になって、我々の切符は軟臥(4人用個室寝台車)なので別の待合室があることに気が移りました。が、ここにも特別な表示は無く、22:00過ぎになってやっと出た表示は、「T43 23:30 西安 遅延」というものでした。

この表示おかしいですね。日本なら、本来の出発時間21:36以前から表示を始め、本来の行き先を書いてから、遅延なり行き先変更を掲示すると思うのですが、遅れた時間近くなってから上記のような表示が出ると、23:30より更に遅れるのかと思ってしまいます。幸い列車は表示通り23:30に出発し、列車の車掌さんに問質して分かったことは、「延安—西安の間で、雨により線路が傷んで、間引き運転をしているので、この列車は延安まで行かない。延安行きが全く無いわけではないが、急ぐなら、西安で降りてバスで行くほうが速い」ということでした。

延安には我々の到着を待っていてくれる友人がいるので、何時動くか分からない列車を待つわけにはいきません。西安で切符の払い戻しを受け、延安行きのバスに乗りました。書いてしまうと、たった2行ですが、この払い戻しには、北京での苦労に倍増する困難が伴いました。

今回思いがけず、列車の発車時刻のみならず行き先までも変更される事態に直面して、事柄の処理の仕方が、一昔前の中国と全く変わっていないことを痛感しました。高層ビルが立ち並び、自動車や携帯電話が普及しても、中国の本質的な処が変わるのにはまだまだ時間がかかるようです。

例えばスポーツの試合で宿敵を打ち負かした選手達が得意気に自陣に戻って来る様子を「選手達は意気揚揚と引き上げてきた」などと言います。ほかにもこの成語はいろいろな場面で使われています。

今回はその「意気揚揚」を調べてみました。

辞書では日本語と中国語は少し言い回しが異なりますが、それぞれ次ぎのように載っています。

▲三省堂 現代国語辞典：

「意気揚揚 得意になって元気があふれているようす」

▲小学館 中日辞典：

「杨扬得意 (yáng yáng déyì) 意気揚揚」

この成語の由来は「史記(第32回 流言飛語の注記参照)・管晏列伝」です。

中国春秋時代、齊の国の晏嬰あんえい^注、字は平仲、通称晏子は当時の著名な政治家であり外交家でもありました。晏嬰は高い官位にあり、才智も人より大変勝っていましたが、その振る舞いはとても穏やかで、誰に対しても謙虚で且つ丁寧でありました。

ところで晏嬰の馬車には決まった御者がおりました。その御者は、晏嬰が馬車に乗って外出する時は、いつも華やかな車覆いを付け、四匹もの馬を繋いだ馬車を御してましたが、その態度は見るからに意気揚々と得意満面になっているかのようでした。実際、彼は馬車を運転しながら自分が晏嬰になったような気分になり、自分は偉いのだと思い、驕り高ぶる態度になっていたのです。

ある時、彼がたまたま自分の家の前を馬車で通過したとき、その得意満面な様子を、彼の妻が門の隙間から見てしまいました。彼女はその様子を見てとても情けない気持ちになりました。そして御者が家へ帰ってくると、妻は顔をこわばらせて「私は実家へ帰り、二度と戻ってきませんからねっ!」と告げました。



挿絵：叶霖

あまりにも思いがけない妻の言葉に御者は驚いて、慌てて彼女に問いました。「いったい何が起きたのだ。どうして突然実家へ帰るなどと言いつ出したのだ」。妻は不満たっぷりの表情で、彼に言いました。

「私はあなたが馬車を御する時に、得意満面でもばりくさった様子をしているところを見てしまったのよ。全くいやらしいっらないわ。あの晏嬰さまをご覧なさい。相国(官職名)という立派な地位に就いていらっしゃるのに、車に座られたお姿は慎ましやかで高ぶっているご様子が少しも見られません。あなたは一介の御者に過ぎないのに、まるで自分が偉いみたいにあんなに得意になっている。私はあなたのような人とはもう一緒に暮らしてゆけません」。

御者はそれを聞いて大変恥ずかしく思い、以後過ちは必ず改めると約束しましたので、妻も彼を赦しました。それ以来その御者の人柄はたいそう謙虚になりました。

晏子はその経過を知って、御者が自分の過ちを改めた精神に敬服し、彼を齊国の大夫(官職名)に推薦したとのことでした。

■注
 晏嬰(? ~紀元前500年)は、中国春秋時代の齊の政治家。氏は晏、諱は嬰、字は仲、諡は平。父は晏弱(晏桓子)。靈公、莊公光、景公の3代に仕え、上を憚ることなく諫言を行った。萊の夷維の人。晏平仲、もしくは晏子と尊称される。

フリー百科事典「ウィキペディア (Wikipedia)」より

八仙人の中に、まるで緑の中に美しい一輪の花を見るように、紅一点・何仙姑と呼ばれる仙女がいます。

八仙の絵姿を見てみましょう。その中に蓮の花を手にし、足の下に雲を踏む容姿端麗な女性がいますね。それが何仙姑なのです。

何仙姑の伝承も色々ありますが、彼女は唐の女帝・武則天時代の人物で、広州増城県のあたりに生まれ、名前は何秀姑と呼ばれていました。父は豆腐屋を営んでいたので、忙しく働く父親の手伝いを良くしていました。小さい頃から明眸皓齒の、見るからに頭の良さそうな子どもで皆に可愛がられていたそうです。

何秀姑の故郷は、山や川の流れがとても美しいところで、山に入れば仙人達が薬の調合に用いる「雲母」という鉱物を採取することができました。十四歳になったある日、何秀姑は山に山草を採りに行ったところ、白いひげを生やしたおじいさんに会いました。そのおじいさんからその辺りの山や川についていろいろ訊ねられた何秀姑はその質問の一つ一つに詳しくはきはきと答えました。

たいそう喜んだおじいさんは袋から大きな桃を取り出すと、お礼だといって何秀姑に食べさせました。その後、不思議なことに何秀姑は食事を口にしなくても空腹を感じなくなり、過ぎ去った昔のことや誰も予測できない未来を知るようになりました。そして十六歳になった或る日、かつて山でであった例のおじいさんにまた出会いました。おじいさんは「雲母を食べると、体が軽くなり、不老不死にもなるのじゃ」と言って雲母の食べ方を何秀姑に教えました。実はこの老人は呂洞賓だったそうで、何秀姑が只者でない素質のあることを知って仙人への道を導きに來たのです。

その後、何秀姑は毎日山へ入っては雲母を食べるようになりました。とその内、まるで飛ぶように峰々を

巡って走り回れるようになり、人々の為に山から薬草を採ったり、病気を診たり、求められて将来の禍福を予測したりするようになり、いつの間にか「何仙姑」と呼ばれるようになりました。

「何仙姑」の話は、人々の口から口に伝えられ広く知られるようになりました。そして、何仙姑の噂は武則天にも伝わりました。食せずに峰々を走りまわるばかりか不老不死の術を身に付けた女性がいると伝え聞いた武則天は深い興味を覚え、側近に命じて、本当かどうかを調べに行かせ、「噂が本当なら、彼女に与えて欲しい」と、霞の色を彩った美しい衣装を持たせました。

何仙姑がその衣装を受け取り身に纏うと、なんと体全体から虹色の光が放たれ、まるで神様が天から下ったようで、周りにいた人々は驚き慌ててお辞儀をし始めました。

何仙姑は十八歳になりましたが、お嫁さんにしたいという人はなかなか現れません。何仙姑の名

前があまりにも名高くなってしまったからでしょう。とはいえ、彼女は全く意に介さず、毎日薬草を採ったり、病気を治したり、山の奥へ行ったり来たりして充実した日々を過ごしていました。

その後、何仙姑が仏教にも、道教にも詳しいと知った武則天は、何仙姑に不老不死の話を聞きたいと願って宮中に迎えました。武則天を訪ねた何仙姑は、不老不死の話だけではなく、国を治める策も進講し、武則天に大変感服されたとのことでした。

やがて二十六歳になった何仙姑は、鉄拐李、藍采和など、仙人達の招きで人間界を離れ、仙人界に行くと伝えられています。しかし、彼女は仙人界に住むようになってからも、人間界の苦しみを忘れず、人々のために天災や悪病を取り除き、様々な善事を行ったそうです。



不老長寿の桃がなるから、夏の金山にも来てみるといいよ、と農民画院のスタッフに言われたのがどうしても忘れられなくて、言われた通り足を運んだときの感動は今でもとても新鮮です。2008年の夏のことでした。

上海に住んでいる時には縁が無かったのか、目にも耳にも入ってこなかった蟠桃というめずらしい品種の桃は、昔から西王母の庭にあって食べると不老長寿の効用があるとされてきました。孫悟空が蟠桃の畑の番人をしていながら自ら盗み食いしてしまい、お釈迦様の罰をうけた、あの桃です。

実物に出会う前は、そんな伝説のイメージからぐめかしい姿を想像していましたが、いざ目にすると、思わず「可愛い！」と叫んでしまうほど愛らしいものでした。まるでバラの花びらのような色合いと形をした桃でした。まん丸ではなく、かなりつぶれていて、しかもおへそがあるかのように真ん中がくぼんでいます。中にはくぼみが穴になってしまってドーナツみたいな形のものもありました。座禅桃という別名があるのも納得です。座禅を組んだ時の足の形にみえます。しばし興奮して眺めていましたが、熟れていそうな赤みの強いものは握いでいいと言われたので、早速桃狩り開始。

中国の伝説の桃が、今まさに自分の手の内にあると思うととても愉快でした。その手に取った感触は水蜜桃よりかなりしっかり固く、水分が少ないということが伝わってきましたが、ガブリと口にして意外だったのは、その粘性です。ジューシーというより、ねっとりしていました。

ただ、私達が桃を採った時はまだ収穫には早い時期だったので、実はあまり甘みがなく正直ちょっとがっかりでした。まあ、伝説上の果物だということで人々はこの桃を有難がっているということであって、味は二の次なのだろうと、それまでの期待を収めました。

帰りがけに、桃畑の人がしきりに、1週間たったらもっと美味しくなると話すので、私以外の上海在住の友人達は箱買いしていました。果たして1週間後、一



「伝説の桃」

戚 藕弟 金山農民画院

緒に桃狩りをしたその友人達から続々と便りが来ました。「本当に残念でしたね。あのときの桃は今絶品です。ねっとり魅惑的な甘さになり、美味しくていくつでも頂けます」

蟠桃を食べに行こうと言いだした本人が一番美味しいところを逃がすなんて！と少々悔しい思いです。

この絵はその時にひとり複雑な心もちでながめていた、甘くない思い出の一枚です。

♪ [中国語で歌おう！会] 趙鳳英先生のこと

「中国語で歌おう！会」の講師をお願いしていました趙鳳英先生が、9月より中国に戻り、四川音楽学院声学科で指導をされることになり、8月末、急遽中国に帰国されました。

2002年から、まる8年に渡って、中国語の歌をご指導頂き、中国語に歌詞を翻訳された日本の曲を含め、これまでの曲数はおよそ80曲近くなります。明るく楽しい先生で歌詞の読みや区切りごとのメロディを、労を惜しまず繰り返し丁寧に指導くださいました。

「中国語で歌おう！会」のメンバーでなごりを惜しみ、オペラ歌手(バリトン)の崔宗宝さんのお店・「獨一処餃子」店でお別れ会をしました。来年の春節の頃、日本に暫く帰国されるとのことですので、その機会に講座を持ったり、「わんりい」の新年会にもご参加いただけるとのことです。

✂ 「地図」がない場所

突然ですが、皆さんはある場所、例えば自分が住む地域の地形や家のまわりの道筋を、どのように把握しているでしょうか？ 毎日通る道沿いの風景、或いは道路地図や区画の見取り図を思い浮かべるかもしれません。日本に暮らす私たちは、子どもの頃から地図の読解を習い、街中に溢れる地図や標識に慣れ親しむことで、複雑な地形や街並みを上空からの(いわゆる鳥瞰的な)視点から平面化し、それを記号で表した「地図」のルールを共有しています。私のような研究者の調査報告では、地図による対象地域の位置確認が必須ですが、これもまた、聞き手がその地図を“読める”ことが前提です。

そんな私が中国陝西省・延川県の農村の調査を始めて最初に驚き戸惑ったのが、多くの家に一枚も地図がない、という事実でした。子どもがいる家には、中国全土の地図(行政区域と代表的都市の位置が記してある)の学習用ポスターが壁貼りしてあったりするものの、道路地図等の実用地図に出会ったことはありません。なにせ農村部の村々をつなぐ道には、舗装された公道でも、「○○村はここ右に曲がる」という類の標識がないのです。道がわからなければ、周囲の人を見つけて尋ねるだけです。

黄土の山谷が連なるこの一帯は、外部者が見てもどこも似たような景色ばかり。一方、地元の人たちは、記憶を頼りに目印もない分れ道を、目的地目指してズンズン進んできます。まさに「地図が頭に入っている」ようにみえるのですが、だからと言って彼らに「地図に描いてほしい」と頼むのは、無理なお願いです。見本を描いてみせ、是非にと頼んでトライしてもらっても、図式化の作業に苦労したあげく、断念する人がほとんど。そして皆きまって、「地図なんて生れてこの方、描こうと思ったこともなければ、必要だと思ったこともない」と苦笑します。そう、ここは“地図が要らない”場所なのです。

✂ 日本人女性、ヤオトンの村で 地図づくりにチャレンジ!

彼らにとっては無用の長物でも、わたしの調査には地図が不可欠。だが、必要なら作ればよいとは、言うは易し行うは難し。辞書によれば、「地図」とは「地球表面を記号、文字などを用いて平面に縮小表現したもの」。陝北地域は起伏の激しい複雑な地形のうえに、山肌に横穴を掘り込んだヤオトンは、まさに大地と一体化した住宅。家々は段々畑状に積み重なり、下のヤオトンの屋上が道路や上のヤオトンの前庭になっているケースも多い。さらに村内の道は、

必要とあれば地面の黄土を掘ってならして数日で完成。逆にあまり人が通らなければ、自然と土が積もり、消えてしまう——そんな“自然発生的”(?)な村の構造を「地図」化するのには至難の業です。この地に来てから、幾度かの失敗を経て、私は早々に地図作りから撤退してしまいました。

そんな折、「とりあえず、見えたもの、歩いた道の記録から始めてみようよ!」と励ましてくれる人物が現れます。旧正月をサンワー村で過ごそうと、日本から遊びに来た造形作家の下中菜穂さんです。私達は村のお正月準備の調査の合間に、木枯らし吹きすさぶ寒空の下、村をくまなく歩き回って地図づくりを開始。(とはいえ、後からぜんぜん網羅できていなかったことが発覚するのですが・・・)地形と大体の距離や方角の記録に加えて、イラスト上手な下中さんには歩いたルートや見たものを紙に描いてもらい、わたしの方は歩きながらビデオカメラを回し、周囲の風景やその位置関係、足元の地面の上り下りなどを撮影していきます。その後、寄宿先である毛家に戻ってから二人の記録を照合し、地図にまとめ上げるという作業を続けました。

しかし・・・村の建物は塙で囲まれた集会所以外、ほぼ全て同形のヤオトン、表札などももちろん無い。出稼ぎで住人不在の家も多い。仕方なく「パッチワーク・カーテンがしゃれた家」「剪纸好きの媛媛の家」「子羊を飼う王ばあさん宅」「双子の赤ん坊の家」「ピーナツを山盛りくれた家」などとりあえずの特徴をメモし、大きな木や数軒ごとに共有している石臼など、数少ない目印と合わせて記録。

ところが、迷路のように入り組んだ村では、数十分ぐるぐる歩き回ってたどり着いた先が、午前中に行った家の真下(地の下?)だった、といった事態が頻発。山の上から眺めても、家が穴なので全体像を鳥瞰的に把握するのは難しく、地図に描き起こそうにもどうにもつじつまが合わなくなってしまう。家に帰って家主の毛水源おじさんに作った地図を見せれば、家々の住人の名や、地形の不明な点を確認できると踏んでいたのですが、彼は地図を一瞥して「自分はわからないし、そもそもそんなものを作る意味がない」の一辺倒。やむをえず我ら二人で地形を再確認しに行ってはまたも混乱、寒さと木枯らしに巻き上がる土埃で意気消沈——そうこうしているうちに新年を迎え、下中さんは帰国、私も他の調査地に移ることになり、地図作りは途中棄権におわりました。

✂ 毛おじさん、我が村の地図づくりに立ち上がる

それから1ヵ月後、街で調査中の私に、日本に帰った下

中さんから一通の電子メールが届きました。「地図作り、写真や記憶をたどってもう一度チャンレンジしましたが、わからない場所、つながらない部分、多数有り。確認求む」

添付されていたのは、畑の野菜や果樹、木々につながれた家畜、住人のおばあさんの似顔絵など、村でのさまざまな記憶までもが描き込まれた、にぎやかな「サンワー村マップ」でした。「この地図を完成させよう。」思った私は準備に取り掛かりました。

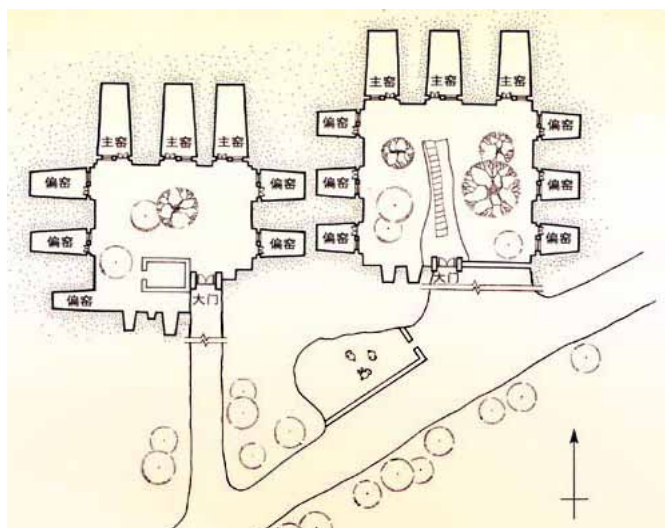
数日かかりで西安まで行き、ヤオトン建築の関連書入手。本から、建築学科の大学生が数十人チームで専用機材を使って測量、製図したある村の地図や、肩にカメラをつけて空中撮影したり、GPSを利用する方法など、ヤオトンの村と格闘してきた建築や地理学の専門家の足跡を知りました。これを機に、機材も専門知識も欠けている、今、この現地にいる私にできるやり方で、自分が一番知りたいことを調べてみよう、と方針転換。「村の地理を、村の人々がどう見て認識しているのか」に的を絞り、リベンジすることにしました。

季節は移って初春、農村は開墾と種まき作業に忙しい農繁期。サンワー村に帰った私は、毛おじさんに下中さんのイラスト入りマップを見せ、それが未完成だと伝えました。

しばらく黙ってそれに見入っていた毛おじさんは、地図を指差しながら堰を切ったように話し出しました。

「そう、ここは昔、泉があって動物の水飲み場だった。だから水が干上がった今でも家畜を放牧する場所なんだ。こっちに描かれている木は、うちの坂をあがった野原のエンジュの樹だね。樹の下には何代か前の祖先が眠っている。墓の目印なんだ。でも、その向こうにある畑が描かれていない。君らは畑だって気づかなかったんだね。そのまだ先には寝たきりのおばあさんの家があるのに。ポンズをまだ連れてったことなかったね——」

おじさんの話はとめどなく続きます。



専門家によるヤオトン地図

「下中先生が日本に帰ってからウチの村を思い出し、忙しい中、地図を描いてくれた。そのことだけで十分嬉しいしありがたい。ポンズ、明日から一緒に地図をつくって、彼女に見せようじゃないか！」

そうは言っても描き方の検討がつかない、と悩む毛おじさんに、私は「外国人である私たちが描いた地図や都会の人たちが使ってるような地図じゃなくて、おじさんが思うやり方で、おじさんが知っている“我が村”の地図を作りたい」と伝え、私と一緒に村を歩くが、それぞれが別々に地図を作り、あとで見せ合いっこしようと提案しました。

翌日、おじさんは昨日より2時間ほど早く、朝4時半過ぎには水汲みを済ませ、畑に出ていきました。いつもは日没までやる畑仕事を早々に切り上げ、午後3時には帰宅。筆記用具を片手に地図づくりへ出発です。並んで歩く道すがら、農繁期に作業を休ませてしまったことを詫げる私に、毛おじさんは言いました。

「70年代までの集団労働時代は、病気でも親戚が訪ねてきたって労働を休むことは許されなかった。もちろん、何の作物をどこに植えるかも自分では決められない。今は今日休みたければ自分の裁量で休むことができる。今、わしらは一番自由なんだ。それに、わしは自分がやりたくて、君の地図作りを手伝ってるんだよ。」

おじさんは一軒一軒訪ね、その家に何個のヤオトンがあるのか、用途や増改築はいつかなど細かく尋ねます。村人の中には日本人の地図づくりと聞いて「スパイか？」と怪しむお年寄りや、「そんなことをして何の意味がある。畑仕事はカミさん任せか？」ととがめる中年男性もいました。

しかしおじさんはいちいち、極寒の正月休みに、地図作りという意味不明な作業に奔走したわれら日本人女性について語り、「彼女達はそれほどわしらに興味を持ち、この村を好きになってくれたってことだ」と言って彼らを説き伏せました。その後は世間話に花が咲くため、日に数時間の調査は数件訪ねてあっという間に終了です。

こうして50戸ほどしかない小さな村を毛おじさんと3



家を訪ねてまわる毛おじさん(真ん中)

週間近くかけてめぐっていく間に、村人一人一人の写真を撮り、彼らの歴史や土地分配時の物語、村の土神の場所やご先祖様のお墓——ともに眼に見えるものは何もない——の位置、幽霊付きのスポットにいたるまで、様々な話を聞いた経験は、私のかけがえのない財産となりました。

ある日、村の空き家の記録に取りかかっていると、毛おじさんが突如、道なき崖下へ向かって滑り降りていくではありませんか。慌ててついていくと、そこには半分以上の高さまで土で埋まってしまった洞穴が。「20年以上足を踏み入れていない」というその荒れ果てた土のヤオトンは、8人家族が一穴に暮らしていたという、おじさんの生家でした。「場所が悪くて、水汲みの口バだって下りられないほど急な崖下だ。貧しくてね。でも、今も夢のなかに出てくるのは新しい家ではなく、このおんぼろの家だから不思議だね」そう懐かしく語るおじさんの昔話を、谷を吹き抜ける風が運んでいきました。

✂️ 毛おじさんが描いた地図

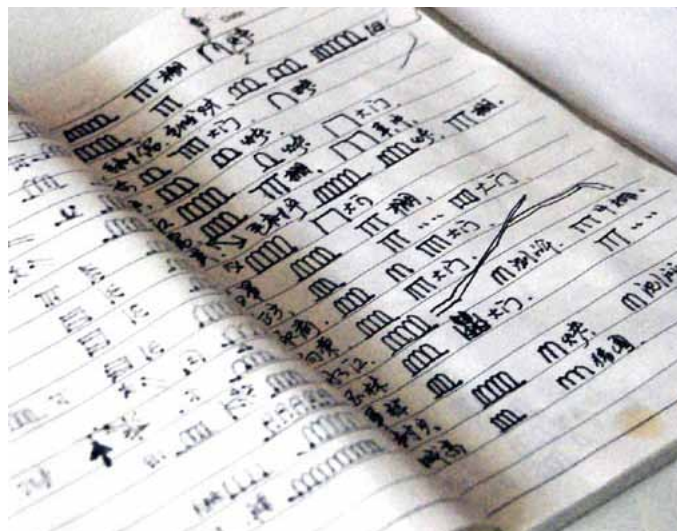
村歩きの中で、毛おじさんが描いていたのは、実は地図ではありませんでした。人が住むヤオトンや入り口の門の素材や大小、家畜小屋の形状、また畑の作物の種類など、おじさんはいくつかのパターンの記号を自ら作り出し、家主の名前の横に、それら家の構成要素の数だけ記号を並べたメモをつけていました。

帰宅後、一人静かに机に向かい、体で覚えている村の道筋や畑の位置を思い浮かべながら、そのメモと合わせて、地図に描いていきます。それは、実際の地形とはすこしずれているものの、家と他の家や畑とのつながりが見事に再現された正確な道順マップであり、微妙なカーブのラインで、その道がどのように上下にうねっているのかもわかるように描かれていました。

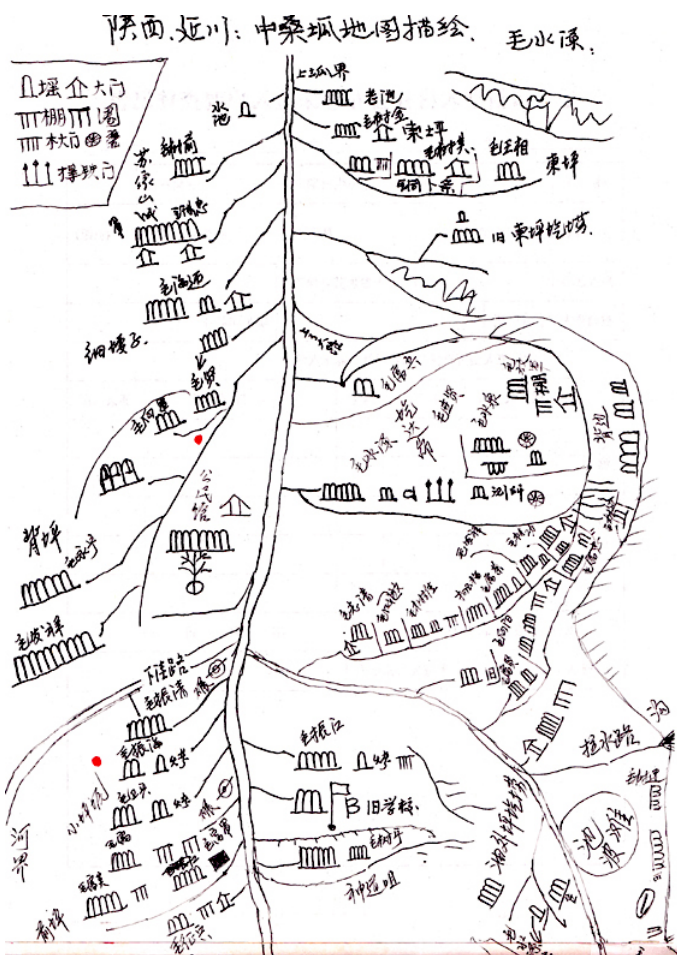
「生まれてから60年近くこの村に住んでいるが、サンワが梨のような楕円形になっていると始めて気づいた。地図を作ろうと思わなければ、生まれた家にも一生行くことがなかった。地図づくりの意味はいまだにわからないけど、面白かったなあ」

と毛おじさん。現在、村の集会所の壁には、大きく引き伸ばしたこの地図が貼ってあり、外からの来客がある度に、それを指差しながら得意げに村を説明するおじさんの姿があります。

近頃、私たちはGoogle Earthなどのインターネット・サイトを使えば、世界中の場所を、宇宙や天空からの視点で、立体的な映像として眺めることも出来るようになりました。でも、地図がなかった村で、自分だけの地図を作り上げた毛おじさんほどには、真剣に自分たちの場所を見ていないのではないかと思います。



毛おじさん村歩きメモ



毛おじさんが描いた地図

✧ 丹羽朋子 (にわたもこ)

東京大学大学院文化人類学研究室、博士課程在籍。中国・陝北地域の民間芸術研究の傍ら、日中の出版界をつなぐプロジェクト「一芯社図書工作室」のメンバーとして書籍や展覧会の企画に邁進中。

*一芯社ウェブサイトを開設しました
<http://yixinshe-books.jimdo.com/>

千里同風夏の海峡潮満つる

hǎixiá xī hé dōng
海峡西和东qiān lǐ tóng fēng liǎng xiāng róng
千里同風兩相榮xià rì cháo mǎn píng
夏日潮滿平

賞析：我国唐朝张若虚在《春江花月夜》中有“春江潮水连海平、海上明月共潮生”的佳句、描写宽阔的江面涨潮时江海不分的场景。大概松本杏花女士读过这首诗吧、她在2009年6月30日7月6日的访华中、饱览了厦门、武夷山、金门岛、土楼和鼓浪屿的秀丽景色、感觉到了海峡两岸亲密无间的血肉关系、故而吟唱了《千里同风》、实为可贵！

〈松本杏花女士の新俳句集「千里同風」出版！〉

松本杏花さんの、中国語訳の俳句に中国語解説を加えた3冊目の新しい俳句集が出版されました。題して「千里同風」です。松本さんの俳句の、このコラムの表題が新しくなったことに気づいた方も多いでしょう。

松本さんは、作句の他、茶道や華道も師範クラスの才能豊かな、和服をきりりと着こなす典型的な日本女性の風貌の方です。が、世界各国の旅を吟行の機会とした俳

句を沢山作っています。中でも、中国は僻地を含めた各地によく出かけられ、これまでに出版された「拈花微笑」「余情残心」の2作品集にも中国での作品が多く収容されていましたが、今回出版の「千里同風」は、殆どが中国各地での作品で占められています。

オリジナルの杏花さんの俳句そのものも、折に触れて拝見し、そのウイットに富んだ句風を楽しんでいます。同時に、その俳句が漢語でどう表現されているかも興味深く、またそつなく漢語になっているのも楽しく、日本人中国人を問わず心のあり方は同じだと実感します。また、よく日本文化を理解された解説で、漢語の言い回しなど、身には付かないながら参考にさせて頂いています。

序文を書かれた中国漢俳学会・会長の劉徳有氏によれば、翻訳者の葉宗敏氏は俳句の漢語訳にあたっては俳人の心に近づきつつ、尚、両国民の美意識の差を埋めるよう努力し、同時に中国語の詩としての形式美を大事に漢語訳をされていると評価しています。 (田井記)

gggggggggggg

〈句集の頒布について〉

松本杏花さんのお話では、第一集の「拈花微笑」は既に手元にないそうですが第二集の「余情残心」と今回発行の第三集「千里同風」は、1000円でお分け頂けるということです。

●問合せ：☎048-885-2918 (松本)

〒336-0931 さいたま市緑区原山2-40-18 松本杏花

【活動報告】〈ビデオ上映とお話の会〉 6月27日(日) 於：町田市民フォーラム3F・視聴覚室

ビデオ「ヤンガー・ミンガー・サンワー/黄土高原のヤオトン暮らしと民間芸術」

ビデオ制作 & お話：丹羽朋子(東京大学大学院文化人類学研究室博士課程在籍)

丹羽さんのフィールドは、陝西省延安周辺の陝北地域、いわゆる黄土高原で、住民の生活とそこに根付く剪紙を中心とした民間芸術を研究テーマとしておられます。現地での滞在先である毛さん一家の生活や、古老が人生観を訥々と語る様子などのビデオを見せていただきました。我々の認識では、過酷とも思える自然の中で、心豊かに暮らす人々の様子が紹介されており、興味深い時間を過ごしました。

お茶の時間には、本職パティシエに教えていただいたわんりい特製のクッキーも用意され、和やかな会になりました。

丹羽さんは、他にも村の行事を撮影したビデオを持っておられ、又これからも増えるので、折を見て、又、このようなビデオとお話の会を開いてくださるそうです。どうぞ楽しみにお待ちください。 (有為楠・記)

■当日の感想より：

- ・貴重な映像でした。中心人物の毛さんの人生哲学にジーンと来ました。一家が父親を中心に仲睦まじく、それぞれの役割に生きていて、家族の幸せの原点を感じました。又、'かまど'の神様を初め、家々、村のあちこちに神様や精霊がいて、見えない存在を大切にしつつ生きるという、私達が忘れかけていた暮らしのあり方を見せてもらえて良かったです。…
- ・黄土高原のヤオトンに住む村人達が、日本では段々失われつつある伝統文化を今も尚、伝え続けていることに感動しました。あまりにも便利すぎる日本も、考え直さなければいけませんね。
- ・現在でもあのような生活をしている地方があると思うと、地球は広いなあとしみじみ思います。異文化に触れることで、今自分達が置かれている状況を客観的に観察でき、それぞれのよい点も見えてきます。

▲ほか多数の感想を頂きました。有難うございました。

四姑娘山麓にラン科の花を求めて

関根茂子&吉井加寿子

2007年に世界自然遺産の指定を受けた、中国四川省ジャイアント・パンダ保護区一帯で、現地の保護活動をしている大川健三氏(四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問)の案内で…、2005年夏には花海子キャンプの花歩き、翌06年夏は大姑娘山登山、1年おいて1昨年08年9月には長坪溝で、標高4200mの湖に映る四姑娘山を見るなど、スケールの大きい自然景観と一面のお花畑にすっかり魅せられてしまった。

昨年6月は日本の山で近年目にすることがなくなったアツモリソウなどラン科の花に会いに行く計画だったが、4月下旬に始まった豚(新型)インフルエンザ騒ぎで頓挫。今年(2010年)6月12日から20日に亘って12名で実施した。下記は同行の吉井加寿子さんからの寄稿である。

(関根茂子)



四姑娘山山麓の湿原(スケッチ：関根茂子)

🌸「天空の花園」クラクラ日記

吉井 加寿子

私は高山病に罹りやすい体質で富士山八合目止まりである。四姑娘山にでかける2週間前、「おまじない」に富士山の雪がない所まで登った。後は「Let it be」だ。

いよいよ車4台に分乗して関根リーダー率いる「蘭ツアー」へ出発。なんと！先頭は救急車。車内には酸素缶が常備されているとのこと。

〈宿泊地2000メートル〉

車は牛を避け、落石を避けて奥山へひた走り、ピンクの色が目立ってきた。サクラソウだ。よくよく見るとオレンジのサクラソウがある。勿論、オレンジのサクラソウは初めてだ。

この日のハイライトは黄色いアツモリソウで、林の中、急斜面を降りて行くと、「あっ！」咲いている。同じ黄色でも礼文アツモリソウとは異なる種類だ。背が高く林に灯をともしたように咲いていた。

帰りは急斜面を登らなければならない。苦しくなり途中で一休み。が、3000メートル位では休むことでコントロールできるようになった。

〈宿泊地3100メートル〉

空気が薄い。寝ていても心拍数が上がっているのがわかる。いよいよ高山病が始まった。腸がやられ、薬で抑えて出発。川沿いの道をさかのぼると黄色いサクラ草、黄色いポピー、赤いポピー、ヤマシャクヤク、シラネアオイもどきやピンクのサクラ草などなど、あたり一面の黄色い野草の中で咲き誇っている。

この日は、この3500メートル地点で明日に備えてブラブラすることに決めた。黄色いポピーに触れたり、鼻を近づけたり、森に目をやれば小鳥が飛来し、豊かな自然と一体になった。



黄色のアツモリソウ(ラン科) (撮影：佐々木洋子)



アツモリソウ(ラン科) (撮影：佐々木洋子)

〈宿泊地2500メートル〉

車で4000メートルの峠越えをする。これは不思議！
なんともないではないか。お寺の階段もへいっちら。
順応したらしい。

天まで続く段々畑、その道端に咲く野の花、きっと牛
が嫌うのだろう。

この地の人々にとっては雑草、その中にトルコキキョウ
を見つけて喜ぶ私たちがいる。町の店先には手折って来
たであろうアツモリソウが活けてあった。

〈4100メートル超のフラワーウォッチング〉

見渡す限り山肌を覆う石楠花、紫色のつつじの群落は
日本とはスケールが違う。気高く凜として立ち、神々し
い威圧感を感じさせる黄色いポピーの花々は峠の霧の中
で見た忘れられない光景だ。そして、リュウキンカの丘
にひっそりと咲く、赤いアツモリソウ、ここは「秘密の花
園」だ。四姑娘山よ、永遠に……



インカルヴィレア・アルグダ(ノウゼンカズラ科) (撮影:佐々木洋子)



バイモ(ユリ科) (撮影:吉井 勉)



ロサ・マクロフィラ(バラ科) (撮影:大橋幸子)



サクラソウ(サクラソウ科)三題
(撮影:吉井 勉)



ポドフィルム・ヘクサンドルム(メギ科) (撮影:長百合子)



シャクナゲ(ツツジ科) (撮影:吉井 勉)

スリランカ大学選抜野球チーム来日

前回号で、今回はポロナルワを紹介すると書きましたが、ポロナルワは延期させて頂いて、スリランカにかかわるホットニュースをお伝えさせて頂きます。7月30日から8月7日まで行われた第5回世界大学野球選手権大会に、なんとスリランカチームが出場しました。これは大事件です。

大会にはスリランカを含めた8カ国からの選抜チームが参加、二組に分かれて予選リーグを行い、各リーグの順位によって準々決勝の組合せが決まります。スリランカはアメリカ、カナダ、台湾と強豪揃いのAグループに入る事になり苦戦が予想されました。Bグループは前回優勝のキューバ、初優勝を狙う日本、韓国、中国とこちらのグループも強豪揃いです。

少しでも野球に関心がある方ならば、スリランカが参加している事を不思議に思う事でしょう。スリランカを鼻屑にしている僕ですら、スリランカでベースボール(硬式野球)が行われている事を知りませんでした。そもそも町中でクリケットに興じている人達を見る事があっても、ベースボールは勿論の事、三角ベースを行っている人すら見た事がありませんでした。アジア予選を突破して参加したというので期待したのですが、やはり予想通りの苦戦続きでした。

7月30日に行われた第一戦の相手はアメリカで、15対0でコールド負けでした。ベースボール発祥国ですから、この点差は仕方ありません。翌31日はカナダ戦です。この日、町田に住んでいるスリランカ人のシリーさんと応援に出かけました。

シリーさんは抜刀や空手等の有段者で学生時代はスリランカの体操チャンピオンだったというスポーツマンです。シリーさんにしてもスリランカでベースボールが行われていることは知らなかったそうです。野球の試合を見ること自体が初めて、ルールも全く判らないようで、試合中にも何故アウトになったのか説明が大変でした。ベースボールには全く興味が無いが、スリランカ選手団の団長であるDr.アソカがシリーさんの友人の友人という関係でアソカさんに会う為に来たそうです。こちら辺がスリランカ人の律儀なところですよ。

観客席のシリーさん以外のスリランカ人は、J9という在日スリランカ人向けのFM放送局を開局しているチャンナさんが取材がてら来ているだけで、スリランカ留学生協会の会員すら来ていません。応援に来ているのは青年海外協力隊の隊員としてスリランカに派遣されてい

たと思われる日本人がほとんどでした。シリーさんも友人を何人が誘ったという事でしたが、スリランカ人にとっては、ベースボールは関心外のようなのです。ベースボールに関心が無くても、遠来の同胞を応援する気にならないものかと怒りたくなりました。もっとも、対戦相手のカナダにしても同じ様なもので、カナダ側の応援席もガラガラです。

試合開始時にホームベースを挟んで挨拶するのですが、体のサイズが全く違います。中学生と大学生の試合のようでした。体格差と実戦経験不足の為か、試合の方は18対0でまたもやコールド負けでした。面白かったのは、試合中にも拘わらず、スリランカ代表チームを率いてきたスリジャヤワルデナプーラ大学体育学部の学部長・アソカさんが応援席にやってきて、試合も見ずにシリーさんとビールを飲みながら話し込んでいた事です。本人は野球経験はないそうですが野球普及にかける熱意は大したもので、中古のピッチングマシンを探せないかシリーさんに相談していたそうです。スリランカのピッチャーの球速はせいぜい120Km台なのに対して、対戦相手は140～150Km台なので球速に目が慣れてなくて打てません。その結果、得点を得られずに零敗です。台湾にも16対0でコールド負けし、Aグループの最下位でした。

予選リーグの結果で決まった準々決勝の相手は、Bグループ1位のキューバです。結果はまたもや14対0でコールド負けでした。キューバはメジャーリーグ予備軍を揃えて本大会でも優勝を狙っているチームです。ここは「こんな凄いチームに14点しか取られなかった、健闘したじゃないか」と考える事にしましょう。その後の順位決定戦でも台湾に21対0、最終試合の中国にも10対0と全試合コールド負けを喫し、1点も取る事が出来ずに最下位でした。因みに大会の結果は1位キューバ、2位アメリカ、3位には元祖ハンカチ王子の斎藤投手(早大)を擁した日本でした。

離日する前日の9日にシリーさんの招待で、スリランカチームが町田市にやってきました。7月28日に来日してから最初で最後のプライベートタイムです。午前10時に小田急町田駅到着後、町田国際交流センターに移り夕方までのスケジュールを説明し終わるや、アツという間に何処かに散って行ってしまいました。

僕は残っていた数人のスリランカ人と引率してきた日本人と一緒に行動しましたが、昼食抜きで商店街を歩き

回る事になるとは考えもしませんでした。家族や親戚、友人へのお土産やプレゼントを探してスポーツショップ、ディスカウントショップ、100円均一ショップ、廉価電気店、古着屋と歩き回り、その間に、たまたますれ違うチームメイトと情報交換しては別の店へと走ります。

瞬く間に、集合時間の午後5時になりましたが、スリランカ人らしく、全く集まりません。帰ってきた人には動かないでくれと伝えても、他の人を探しに行っている間に消えてしまいます。なかなか手強い人達です。6時近くになってやっと全員集合し、シリーさんの自宅に移動しました。全敗はしたものの、ベストを尽くしたスリランカチームの学生達をねぎらいたいと、アソカさんが前夜からほぼ徹夜で用意したスリランカ料理でパーティーが始まりました。みんな久しぶりのスリランカ料理を食べて飲んで大騒ぎです。普通サイズの日本家屋のシリーさん宅に、20数名のスリランカ人と10数名の日本人が集まったので、部屋だけでは足りずに廊下と階段、

庭まで使ったのパーティーになりました。

選手たちに訊いてみると、スリランカでベースボールが始まったのは1996年だそうです。JICAコーチの指導でベースボールを行う子供達が徐々に増えているそうです。捕手のバヌーカ君は大学卒業後は働きながら、自分がベースボールを始めたクラブでコーチをするのが夢なのだそうです。今回の来日メンバーの誰かが指導者となり、世界選手権で1勝する日がくるのが楽しみです。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでの折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。



アジアを読む(69)

魔女の1ダース ～正義と常識に冷や水を浴びせる13章～

米原万里 著
新潮文庫

ツアー旅行に参加したときのこと。一人の女性客が、あてがわれた部屋番号が「13」であることに抗議して、部屋を替えてもらっていた。疲れて寝るだけの部屋の番号なんて、全然気にならないけどなあ…。確かに日本では「死」に繋がるとして「4」の番号を避ける傾向にあるらしいけど、と私たちはこそこそ話。ちなみにこの本によれば、仏教では「13」は縁起のいい数らしい。それを知っていたら、この女性客もわざわざ部屋を移らなくても済んだかも。

著者の米原万里さんは、ロシア語の同時通訳者。彼女によれば、通訳者は、聞き取るときは話し手の立場に、訳出するときには聞き手の立場に身を置く。つまり、違う言語＝違う価値観の間を行ったり来たりする職業だという。

さらに、彼女の場合、9歳から14歳までチェコスロバキアで過ごし、ソビエト連邦外務省が直接運営する学校に通学。つまり、地元ではチェコ語、学校ではロシア語、家庭では日本語を使っていたはず。バイリンガルの後輩くんによれば、英語で話すととき、日本語で話すときはキャラクターが変わるらしいから、彼女も3つのキャラクターを内蔵しながら、大人になったのでは。だから、複眼で世界を眺める特殊能力が備わった。

その特殊能力を活かして書かれたこの本のテーマは、

「常日頃当然視している正義や常識に冷や水を浴びせてみたい」。某国の王子様が「豪奢で華やかで気品があって威厳がある」理想の車として、祖国に持ち帰った日本の車が霊柩車だったというプロローグから始まり、価値観がぐんやりする話がてんこもりである。同時に、それでも変わらない人間の普遍的な「なにか」にも言及。多くがシモの話なので、例示は避けるけれど…。

本書から、勇気の出る話を。著者によれば、国際語である英語圏の人たちは、外国語を学ぶ意欲が低く、よって、ひとつの言語＝ひとつの価値観しか持ちえないことが多い。その点、日本語のようなマイナーな言語圏の人たちは、外国語を学ぶ、つまり複数の価値観に触れる機会を得る。

さらに、母国語とかけ離れた言語であればあるほど、ゼロから構築していくため、よりネイティブに近い能力が得られるのだという。むしろ、苦手な人

ほど、習得したときには完璧な言語を操る…らしい。ずっと英語に苦しめられてきた私にこそ、英語を完全にマスターできる素質があるということだ。初めて英語を勉強しなおす気になったが…、それがいつになるかは、私にも分からない。

(真中智子)



奥の湿原で本当にこれが今回最後となる美しい風景を見届けた私とスンは、洛絨牛場まで戻ってきた。私はこの道を今回の旅だけで一週間の間に4往復もしてしまった訳だ。さようなら、またきっと来るから・・・道端の岩や木や小川の流れに向かって心の中で呼びかけながら歩いた。

洛絨牛場に戻ると、牛飼いの小屋の前ではあの小さな小姐が弟を遊ばせていた。2歳だという弟は歩けるようになったばかりらしく、足元はまだおぼつかない様子なのに、姉が手を放すと私達がビックリするようなスピードでタタタッ・・・と草の上を駆け出したかと思うと、足がもつれてバーンと激しく転んだ。いつもお母さんに大切に見守られている甘えんぼうの子供なら、これだけでも泣き出して抱っこをせがみそうな年頃なのに、彼は転んだ事など意に介さぬ様子で助けに駆け寄った姉の手を振り解き、再び勢いよく走っては転ぶのを繰り返していた。きっと走る事が楽しいのだろう。ヨチヨチ歩きにしては駆け足のスピードもずいぶん速い。チベット族の子は強いんだなあ・・・。

小屋を覗いて声をかけると、初めて会った時には警戒の色を隠さなかった老婆が笑顔で手を振ってくれた。

洛絨牛場から自然保護区の入り口までスンは待たせてあった馬に乗って帰るのだが、私は徒歩だ。道は下りだし馬は馬方と同じ速度で歩くので、着いていかれない事は無いがやっぱり速い。更に道は昨夜の雨でグシャグシャのドロドロだ。ひいひい～！ しみじみ亜丁との別れを惜むような余裕も無く、ズボンの裾を泥だらけにしながらせわしなく歩いた。

どうやら自然保護区の入り口近くまで辿り着きホッとしていると、突然後ろからやって来た少年が「你好!」と呼びかけてきた。誰かと思えば、初日に私のザックを沖古寺まで担いでくれた16歳のポーター少年だ。あの時は無粋な兄の出現で気まずい別れ方をしてしまったが、この時の少年は、まるでそんな事は無かったかのように笑顔を浮かべていた。

「亜丁はどう? 君の友達にはあえた!？」

「うん! 会えたの!! すごく嬉しかった～」

「それは良かったね! 僕も嬉しいよ。それじゃあ元気で」

赤い頬をした可愛い少年は手を振って去っていった。この一件ですっかり良い気分になって歩いていると、大

人に混じり、大きな荷を背中に背負って歩いてきた少年が声をかけてきて、ポケットから折り鶴を取り出して見せた。あ! あの雨の日に沖古寺の折り紙講習と一緒に折り紙をして遊んだ子だ～!! 13歳くらいの年頃と思われるこの少年は、誰よりも覚えが早く目を輝かせながら上手に折鶴を折っていた子だ。

少年が得意そうに差し出して見せてくれた折鶴は、私があげた折り紙ではなく何か別の紙を使って折られていた。あの時にしっかり折り方を覚えてしまい、自分で調達した紙を切って新たに折られた物なのだろう。これまでもアジアの国をあちこち旅して、色々な場所で折鶴を折って見せてきたが、紙の角がぴっちり合うように重ねながら、細かい行程を繰り返して作り上げていく折り紙は、手先の器用さと繊細さが求められ、そんな遊び方をした事の無い国の子供達に教えても、ちゃんとマスターして自分で折れるようになる子供は意外に少ない。この子は頭が良いんだな・・・

私はこうして遊んでいるというのに、まだ大人にもなる前の少年が汗を流して重そうな荷をせおい、煤けた服を着て働いているのを見ると胸の奥の方がちょっぴり切ない。私の亜丁の友人のように、都会の学校に勉強に出るチャンスを得られる子供もいるが、この子の家庭はどうなのだろうか。こんな利発な少年が山間部の小さな村で暮らし、この先高い教育を受けるチャンスに恵まれないまま、田舎で肉体労働をする生活を送って大人になるのだとしたら・・・

彼の差し出した折鶴に「很好!」と親指を立てて見せると、少年は嬉しそうに笑顔を見せて「それじゃ、仕事だから行くね」と手を振った。去っていく少年の後ろ姿を見ながら、私は思わずその背中に向かって心の中で呼びかけた。

『少年よ・・・、大志を抱け!』

これで本当に最後かと寂しい気持ちになりかけていたが、思いがけない二つの再会は亜丁の最後を飾るのに相応しい嬉しい出来事に思えた。これで今回は心置きなく亜丁を去って行ける気持ちになれた。

自然保護区の入り口では先に下山していた北京軍団の二人と、馬で先に着いていたスンが待っていてくれた。車が走り出すとスンが言った。

「小姐、これから君はどうするんだ？ このまま俺たちと稲城に行くのか？ それとも亜丁村で降りるのかい？」

先発した彼らの仲間は既に稲城に到着している頃だし、スン達三人の荷物も朝のうちに車の中に積み込んであった。彼らの予定はこのまま亜丁村に立ち寄り事なく通過して、稲城に向かってしまうのだ。もし私も稲城まで彼らの車に乗せて貰うのならば、宿に戻っても残してきた荷物を取ってすぐに出発しなければならない。

一瞬、昨夜会いそびれていた亜丁の少年の事が頭をよぎった。このままこの土地を出てしまえば、またサヨナラの挨拶もできないままお別れだ。そう考えると切なかった。せめてもう一度会って別れの言葉くらい伝えたい……。

だがあのパーティの時に彼は成都の学校に戻るために明後日この村を出るという話をしていたのではなかったか。今ここで村に残っても少年に再び会えるという確証もなかったし、昨日の半日だけで時間を持て余しかけていた亜丁村に、もう一日滞在してもやる事は残っていないように思われた。しかもこの後一人で稲城まで戻るには、帰りの交通機関を調達するために道路を通る車をヒッチハイクしなければならない状態だ。切ない気持ちを押し殺して言った。「ううん、私も稲城まで一緒に連れて行って下さい」

亜丁村の宿に戻ると慌ただしく荷物をまとめて、宿の主人に挨拶すると再び車に乗り込んだ。車はすぐに発車して私がバイクで走った坂を登り、あっという間に村を見下ろす峠のカーブを曲がるともう亜丁村は見えなくなってしまった。晴れていれば聳え立つ『仙乃日』の姿が見られる筈だが、やっぱりこの日も神山の姿は雲につつまれていて見る事はできなかった。亜丁からどんどん離れていく車の中で、私は無性に寂しかった。

いつの間にか車の後部座席でぐっすりと眠ってしまっていた。車が揺れて停車するのを感じて、目を覚ました私の耳に、「チッ！ 参ったなあ〜」と、うんざりしたような声をあげ舌打ちする北京軍団の話し声が聞こえてきた。いったい何があったんだろう……、車外のざわめきに薄目をあけて窓の外を見ると、何処かの村の道路沿いに市が立っているらしく道端には野菜やきのこ類などがギッシリ並べられていて、道路はそれを目当てに集まってきた村人達でごった返していた。とても車が通過できる状況では無いが、それより何だかとっても面白そうじゃ

ないか〜。私は出来る事なら車を停めて、この定期市のようなものを見物したかったが、北京軍団の男達はそんな物には全く興味が無いらしく、村人達に毒づきながら派手にクラクションを鳴らし続けると、道路の人垣を蹴散らすように無理やり車を発進させた。何とか人ごみを通りぬけた車の中で、料理補助の男が村人達を蔑むような笑い声をあげ「全くどうしようもねーな、あいつらは……」とつぶやく声が聞こえてきた。

何で？ あなた達はこの土地に興味があるから旅行しにやってきたんじゃないの？ 勝手に人の土地に入ってきて、なぜその土地の人達を悪く言うの？ この数日間の疲れと早朝から北京軍団の馬を追いかけて激しく歩いた今日一日の疲れがいきなり噴き出していた私は、完全に目を覚ます事ができないまま再び目をつぶり、ボンヤリと考えていた。

亜丁村を出て数時間後、見覚えのある稲城の街中に到着した車は、一軒のホテルの敷地の中に入って停車した。先発隊があらかじめ取っておいたホテルの名前と所在を携帯電話で連絡を受けていたのだ。車から降りると、先に着いていた石頭達が仲間を迎えに出てきていた。

「小姐、君はどうする？ このホテルに泊まるかい？」

彼らの宿泊している部屋の値段は200元という事だった。日本円にして3千円といったところだ。日本人の感覚で言えば決して高い値段では無いだろうが、今回の旅で私がこれまでに泊まってきた宿の値段は平均して20元。更に中国元の手持ちが心もとない私としては、200元など分不相応な法外価格だ。

「無理無理〜!! そんな高い部屋には泊まれないわ!」私が声をあげると、ホテルの受付にいた女の子が向かい側に建っている、別棟の建物を指差すとあちらの部屋なら、テレビも付いて30円で泊まれますと勧めてくれた。テレビは別に必要なかったが、勿論私は即承諾だ。お金を払うとその場にいたホテル従業員の女の子が私を部屋に案内してくれた。

中庭を横切って建物の階段の下に着くと、案内してくれていた女の子が「手伝います」と私が担いでいるザックのひとつを取り上げながら「亜丁は楽しかったですか？」と私に尋ねた。「あれ？ 何であなたは私が亜丁に行ってた事を知ってるの？」不思議に思い聞き返すと、彼女は言った。

「私、あなたに会った事があります」

「え？」

驚いて彼女の顔を見つめ返した私は、何かが頭の中にひっかかっているような気がして咄嗟に尋ねた。

「あなたの名前は!？」

「シャムウ・・・」

一瞬稲妻が光ったように、最初に稲城に到着した時にバス停でホテルの客引きをしていた女の子が道案内をしていた記憶が頭の中を閃いた。

「ええ——!!! シャムウ!! あなただったの〜!？」

思わぬ再会の喜びに思わず彼女をぎゅっと抱きしめた。

「あなたにまた会いたいと思ってたの〜!!」

何故か私の記憶の中のシャムウはまだ中学生程度の小さい女の子だったような気がしていたが、今日の前にいる彼女は18歳くらいだ。

「だから、気がつかなかったのよ」とそれをシャムウに告げると、「私、一週間でそんなに成長したの?」と笑っていた。まだ一人旅の始め頃で、まだ微かに心細さを抱えていた私に優しくしてくれたシャムウ。再び稲城に戻った時は彼女のホテルに泊まりたいと思っていたが、亜丁にいる間の色々な出来事や登山の疲れですっかり忘れていた。それなのに偶然泊まった場所がシャムウのいるホテルだったなんて!! まるで神様が引き合わせてくれたみたいだ。今回の旅では本当に神様に守られているような気持ちになる偶然がとっても多い。きっとこの土地にはチベットの神様が本当にいるのだ。私がこの地を訪れた事を歓迎し見守っていてくれるのにちがいない。

北京軍団のホテルと同じ敷地の中に建っている、安部屋の建物はホテルというよりアパートか団地のような造りで、中庭に面した外の通路を歩いて自分の部屋のドアを開けるとそこにワンルームの部屋があるという仕組みだった。シャワーは共同のようだ。だが稲城に戻ってきたらシャワーなんて必要ない。亜丁の山の中で5日間もお風呂に入っていない私の頭の中は、一週間前にアーロンに連れて行かれた『浮世辺絶温泉』の事でいっぱいだった。亜丁村にいた時から稲城に戻ったら、まず真っ先にあそこに行こうとずっと楽しみにしていたのだ。部屋に荷物を置いて一休みすると、すぐに階下へ降りて行ってシャムウにタクシーで温泉に行きたいとお願いすると、ホテルの外で客待ちをしていたらしいタクシーの中から、自分の友達だという若い青年の運転するタクシーを呼んできてくれた。

私がタクシーに乗り込むと、シャムウが「バス停に客引きの仕事をしに行くから乗せて行って」と一緒に乗り込んできた。バスターミナルの前に車を停めて、お客を乗せ

た長距離バスがやってくるまで3人でお喋りしながらバスの到着を待った。タクシードライバーは気立ての良い優しい青年で、やはり商売はあまり得意でないらしく、競争の激しい稲城のお客争奪戦では苦心しているようだった。亜丁まで乗っていく日本人のお客さんを捕まえたいから、自分のタクシーを利用してくれるよう、日本語で宣伝文句を書いてくれと名刺を取り出し、私は彼の希望の文章をタクシーの名刺に書き込んであげた。そんな風に過していると、先ほどまでは、友達の少年と中途半端に別れたまま亜丁を出てきてしまった寂しさが尾を引いていて沈みがちだった気持ちが癒されて、胸の中を温かい気持ちが満ちてくる。色白でふっくらした頬と切れ長の大きな目をした可愛いシャムウ。何だかずっと前からの友達のよう気がしていた。

バスが来てシャムウがホテルの名刺を手に握り締め車から降りていくと、私は温泉に向かった。この場所に来たのはほんの一週間前の事なのに、なんだかずいぶん時間が経ってしまったような気がした。温泉宿の中に声をかけると宿の女将の老婆が出てきて、私の顔をみると笑顔を見せた。

「私の事、覚えてる？」

「ああ、勿論覚えてるよ。あれからあんたの友達も二人でまたやって来たんだよ」

え? 友達ってアーロンとシャオチンの事? 老婆に聞き返すと確かにそうで、しかも老婆の言うことには二泊もしていったのだそうだ。何だ〜、あの日亜丁で別れた後、二人はまたここに泊まりに来ていたのだ。結局アーロン達はここの温泉に4泊もしていたという訳だ。せっかく香港からはるばるやって来たのだし、それだけ時間があったのならもっとゆっくり亜丁の美しさを見て欲しかった気もしたが、やはり此处が気に入っていたのだろう。

通常の旅行者なら日帰りか一泊二日程度しか滞在しない亜丁に一週間も滞在していた私とて同じ事だ。それにここの温泉宿は本当に素晴らしい。お風呂もいいが、何より宿の人が温かく迎えてくれるこの雰囲気人間好きのアーロンも惹きつけられていたのだろう。温泉にはゆーっくり入りたかったので、タクシードライバーには2時間後に迎えに来てくれるようお願いした。

「ええ〜! 2時間も〜!？」と呆れる彼に「もし貴方が迎えに来てくれないと私は困っちゃうから、お金は稲城に戻ってから払うわ」という私の申し出にも、気のいい青年は快く承諾してくれて「じゃ、2時間後に」と走り去って行った。

(次号に続く)

Sukuma Wiki「スクマウィキ」という名前の野菜がケニアにはある。

Sukuma(スクマ)というのはスワヒリ語の動詞で、「押す」「なんとか持ち越す」などの意味がある。Wiki「ウィキ」とは、英語のweek(週)からきており、Sukuma Wikiを意識すると「一週間をなんとか頑張っ乗り越える」という意味の野菜である。どうしてこんな名前がついているのだろう?とずっと不思議に思っていた。今年の夏、ケニアから持ち帰ってきたスクマウィキの種を自宅の庭に植えてみた。そして自分で育ててみて、この野菜の名前の訳がなんとなく分かったような気がする。

3ヵ月ほどで立派な葉が大きく成長し、食べられるようになった。一番大きな下の葉を採って食べても、次々に上の葉が広がってくる。小さなスペースで所狭しと植えても、すくすくと育ち、あっという間に収穫できるようになる。種は格安な上、少々の水さえ与えれば育ち、どんどん収穫出来る。

ケニアにはトマト、キャベツ、じゃが芋、ニンジン、ほうれん草などがあるが、市場では少し高価だ。しかし、このスクマウィキはどこにいても見かけるありふれた野菜で非常に安い。ほうれん草のように束ねられた大束でも10円ほどだ。自分で育ててもいいし、市場で買っても安い。何とか次の週(ウィキ)を生き延びる(スクマ)ための野菜。

私がいた孤児院でも毎週1, 2回はこの野菜がメニューに入っていた。スクマを細かく棒状に切ってトマトや玉ねぎと一緒に油で炒める。最後に塩を少しかける。味は苦味が少しあるが、とてもおいしい炒め物料理だ。これに唐とうもろこしの粉をお湯で練ったウガリという主食があれば立派な食事だ。スラムの中に建つ家の前には、このスクマが所狭しと植えられている。

孤児院の食事メニューには、このスクマがよく出てくる。

ぎりぎりの食生活を支える「スクマウィキ」という野菜は、栄養も満点で、沢山の人の生活を経済的に支えている。

実は、日本では「ケール」[※]と呼ばれ、青汁材料として知られている。それにしても、ケニアの人はいろいろな物に対して名前の付け方が面白い。Sukuma Wiki(来週も持ち越そう!)とはなんて面白い名前なんだろう。



スクマウィキ

注：ケールは、地中海沿岸が原産でキャベツの原種に近く、温暖な気候であれば一年中栽培可能で収穫量も多い。キャベツとは違い、結球しない。栄養に富み、ビタミンの含有量は緑黄色野菜の中でも多く、青汁の材料として利用される。

(フリー百科事典「ウィキペディア(Wikipedia)」より)

'わんりい' 会員の岩田さんから、
「山西省・九日間の旅」のお誘い
 期日：10月18日から26日の9日間

| 日程 | 大まかなコース | 宿泊地 |
|-----|--------------------|----------|
| 1日目 | 北京到着 | 北京泊 |
| 2日目 | 大同(雲崗石窟、その他見学) | 大同泊 |
| 3日目 | 五台山。途中、懸空寺、応県の木塔見学 | 五台山泊 |
| 4日目 | 五台山のお寺見学 | 太原近くの温泉泊 |
| 5日目 | 平遥。途中、お寺見学 | 平遥泊 |
| 6日目 | 平遥城内の見学 | 平遥泊 |
| 7日目 | 運城。塩湖の温泉で休養 | 運城泊 |
| 8日目 | 北京 | 北京泊 |
| 9日目 | 早朝の便で帰国 | |

* だいたいの費用：約25万円(航空運賃も含む)

* 最初と最後の北京は自由行動

* 出発は関空からですが、成田からもほとんど時間差がなく北京に到着、帰国もほとんど同時間に出発便あり。北京空港で待ち合わせが可能です。

* 切符の手配は岩田さんがして下さるそうですが、あくまでも自分で北京行きの飛行機に乗れる人が条件です。

* お申込みは9月10日(日)迄に。但し、北京・大同間の国内線が満席になる可能性があります。お申込みはなるべく早く。

【問合せ&申込み】 岩田温子 ☎042-736-6642
 E-mail: huixiang@excite.co.jp



映画上映会 (主催：町田国際交流センター・協力部会)

「私の叙情的な時代」(99分) 監督：任書剣

PFF アワード2009にて、企画賞/技術賞/観客賞(福岡・名古屋)受賞作品

●町田市民フォーラム・3Fホール (定員：188名)

JR横浜線町田駅ターミナル口・徒歩3分 小田急線町田駅南口・徒歩7分
(194-0013 町田市原町田4-9-8)

●2010年10月22日(金) 上映開始19:00

●お申込み方法：'わんりい' 会員と関係者の皆様は、下記の 'わんりい' 事務局に電話又はE-mailでお申込みください。9月27日までにお申込みの方は会報と一緒に入場券をお送りします。その後にお申込みの方は、当日、受付で参加券をお渡しします。但し、定員になり次第締め切りになりますのでお早目のお申込みをお願いします。

☎：042-734-5100 'わんりい'
E-mail：wanli@jcom.home.ne.jp



▲任書剣監督のことは：

「私の叙情的な時代」は、拝金主義だが人情味もある中国人留学生、台湾の女子学生、韓国の男子学生、不法滞在の中国人夫婦、団塊世代の日本人など、東京に暮らすさまざまな国の人々を描いた群像劇です。文化背景の異なる人々が出会い、壁を乗り越えて成長し、どのような人生を切り開いていくのか、この作品を通して表現したつもりです。グローバル化した現代において、「近くて遠い国」の人々の生活が実は緊密に繋がっているということを感じていただければ幸いです。

【任書剣 略歴】

1998年1月 中国南京大学卒業
2000年4月 日本映画学校入学
2003年2月 日本映画学校卒業(新百合ヶ丘)
2003年4月 日本大学芸術学研究科映像芸術学大学院過程
2008年3月 日本大学芸術学研究科映像芸術学博士号取得

【これまでの主な映像作品】

◆2002年「かれらの家」 日本映画学校2年終了作品
◆2003年「蒲公英の歳月」日本映画学校今村昌平賞/山形国際ドキュメンタリー映画祭2003・あきた十文字映画祭2003出品
◆2004年「北朝鮮の夏休み」日本大学大学院湯川制賞/山形国際ドキュメンタリー映画祭2005・あきた十文字映画祭2006出品

▶任さんの人柄と映画のこと

任さんと知り合ったのは、2000年春、'わんりい' が馬頭琴演奏のチ・ブルグッドさんから、内モンゴル僻地の小学校再建協力の依頼を受け、チ・ブルグッドさん親子と協同でチャリティコンサートの企画を進めていた時だ。丁度、任さんが新百合駅前の日本映画学校に入学した年で、麻生市民館でそのチラシを見、台湾系の雑誌にその活動を紹介したいとの取材目的で我が家に見えた。

まだ20代半ばの若者ながら、国や民族の違いはあっても、人は人としてお互いに理解し合えるという任さんの確たる信念に共感し、以来付き合いが続き、任さんが監督・制作の映画を'わんりい'の活動として何回か上映してきた。'わんりい'メンバーたちにとって、任書剣さんの名前は馴染みのある人が多いと思う。

「かれらの家」は夫婦一緒に日本に留学しながら、ともに癌を病んだ科学者夫婦に対する日本人隣人達の優しさであり、「蒲公英の歳月」では、東京の片隅に不法滞在する中国人兄弟たちが助け合いながら、自分達のよりよい未来の構築を目指し、様々な犠牲に耐える、人間味溢れる姿を写し撮った。そして、「北朝鮮の夏休み」では、夏休みを利用し

た一泊二日の北朝鮮の旅を通して、カーテンの向うの人々が私たち同様に愛を語り夢を語るごく自然な姿をかいま見させてくれた。とかく私たちは北朝鮮に対してシビアな眼を向けがちだが、任さんの映画を見た人たちの、北朝鮮の人々への眼差しはきっと優しくなったのではないかなと思う。というのも北朝鮮の人々を撮影する任さん自身の目線の優しさがあるからなのだ。

以上はすべてドキュメンタリーの映像だが、「私の叙情的な時代」では、これまでの映画制作に込めてきた想いを更に温め圧縮し、自分でペンを取ってシナリオを書いた。

この映画は、任書剣さんの上記のメッセージにあるように、東アジアの国から来日し東京で出会い、交流を通して考えの違いを受け入れ、国や民族を超えた個としての人間同士として繋がり合えることを確信させる。(田井記)

【9月の定例会と10月号のおたより発送予定日】

- ◆定例会：9月17日(金) 13:30～
- ◆10月号おたより発送：9月29日(水) 13:30～
共に田井宅です。どなたでもご参加下さい。

日中友好会館 第20回 (2010年度) 中国文化の日

① 中国浙江省舟山諸島の伝統音楽「舟山鑼鼓」公演

出演：舟山市芸術劇院

- 10月9日(土)～11日(月・祝)
- 於：(財)日中友好会館・大ホール(文京区後楽1-5-3)
- 10月—9日、15：00/19：00
- 10日、15：00/19：00
- 11日、15：00

*全5回公演、毎回30分前開場

- 参加費：¥1,000
- ★チケットぴあにて販売中！
(Pコード：113-473)
- ★チケットぴあ
TEL：0570-02-9999
インターネット予約
<http://t.pia.jp/>

主催：(財)日中友好会館 協力：(株)全日本空輸

後援：中国駐日大使館、(社)日中友好協会 他多数

中国最大の諸島地域「舟山諸島」には1390もの島が点在し、漁業が盛んな地域で、海に囲まれた厳しい自然環境の中、島民たちは漁を生業とし独特の文化を築いてきた。

「鑼鼓」は、「十三面鑼(十三面の銅鑼)」と「五面鼓(五面の太鼓)」の二種の打楽器を指し、古来より出港、帰港、進水式などの折に大漁と海上安全を祈り、港や船上で打ち鳴らされた。豪快な気質の島民たちが演奏する曲は、海への願い、喜び、悲哀などが感じられる。



② 「中国漁民画展」 入場無料

- 9月27日(月)～10月24日(日) 10：00～17：00
- ※(10/9、10のみ21：00まで開館)火曜休館(10/12は開館)
- 於：(財)日中友好会館/美術館

舟山諸島の島民(漁民)が描いた「漁民画」の展示。漁民画は、古くから庶民の間で描かれていた絵を元に、1980年代初頭に現代民間美術として発展した。

漁や海辺の暮らし、海の神話伝説などが情感豊かに描かれた、自由で素朴な画風はどこか懐かしい雰囲気が漂い、他地方の農民画には見られない抽象的な表現が魅力である。

今回は主に舟山市群衆芸術館の所蔵品約90点を展示し、知られざる中国漁民の民間芸術を紹介。



● 関連イベント：【漁民画家による作品解説】

舟山の漁民画家で漁民画芸術発展に尽力された方が来日し作品について解説。

予定日：10月9日(土)、10日(日)

- ◆ 日中友好会館へのアクセス：都営大江戸線・飯田橋C3出口より徒歩約1分/JR、地下鉄・飯田橋駅より徒歩7分/丸ノ内線・後楽園駅より徒歩10分
- ◆ 問合せ：日中友好会館 ☎03-3815-5081(担当：小林)

第5回 姜小青『弦之縁』フレンドリーコンサート

2010年9月8日 19:00(開場：18:30)

於：めぐろパーシモン小ホール 東横線都立大学駅徒歩7分
4,000円(前売)4,500円(当日)全席自由

共演者：井上 麗(ハープ)、木津 茂理(民謡歌手・太鼓)

★主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

問合せ&申込み：TEL：080-1304-7347(村山)

ドキュメンタリー映画「小屋丸」(冬と春)

フランス シネマ・ドゥ・レアル映画祭正式出品

(監督：ジャン＝ミッシェル・アルペローラ)

2010年10月2日～ 於：ユーロスペース(渋谷)

新潟県十日町市・津南町で3年に一度、世界のアーティスト、文化人、研究者、都市のサポーターと住民が協働して「大地の芸術祭・越後妻有アートトレエンナーレ」が開催され、日本有数の豪雪地帯であり、また山間の美しい棚田で知られた山深いこの地域が一大アートの舞台となり、世界各国の芸術家達が制作したカラフルでユニークな作品が展示される。

ジャン＝ミッシェル・アルペローラ監督は、アルジェリア生まれの、フランス人現代芸術作家として知られた版画家で、2003年の大地の芸術祭に参加し、十日町市小屋丸集落に11の壁画を持つ世界最小の「リトル・ユートピアン・ハウス」を制作した。



そして、この集落に魅せられた監督は、2007年以来度重ねて来日し、この地の人々の日々の営みと自然の移り変わりをあるがまま、奇をてらわず丁寧に写し撮った。詩情溢れるモノクロの映像で、どこか子守歌を聴いているような、かつては日本のどこの村々にも流れていた暖かく優しい時の流れに包み込まれる。

当「小屋丸 冬と春」は3,000点の応募から選ばれ、フランスの歴史ある国際ドキュメンタリー映画祭 シネマ・デュ・レアル正式出品されて、ヨーロッパのテレビ局アルテで、フランスとドイツで放映されたが、この夏、続編の「夏・秋編」も完成し、こちらも同テレビ局で放映が約束されているとのことである。

アートをキーワードに地域の活性化を目指した「大地の芸術祭」は、日本の田舎の生活が外国人アーティストの目に触れる機会となり、日本の小さな昔ながらの営みを続ける村を世界に飛び立た

せ、そして私達日本人にその素晴らしさを再認識させる機会を作った。

(田井)

漢詩の美しい音声とリズムで漢詩を楽しむ **京劇俳優・殷秋瑞さんが読む・漢詩の会 そのII**

殷秋瑞さんの当り役、霸王別姫(項羽と虞姫の別れ)の場面で霸王の項羽が悲憤を込めて全身で唱う「垓下歌(力は山を抜き…)」を聴こう! 読もう! 読めるようになろう! *録音機をお持ちの方はご持参下さい。

～その他、長恨歌(白居易)・京劇の中の漢詩、そして古今親しまれている漢詩いろいろ～

*9月27日までにお申込みの方には資料を前もってお送りします。

● **場所: まちだ中央公民館・視聴覚室**

〒194-0013 原町田6-8-1・町田109/6F / JR横浜線町田駅・ルミネ口徒歩3分/小田急線町田駅南口徒歩5分

10月8日(金) 10:30～12:00

参加会費: 1500円 定員: 30名

お申込み&問合せ: ☎050-1531-8622 (有為楠 ういくす)

E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp



殷秋瑞 (いんしゅうずい)

中国戯曲大学卒業。顔全面に濃厚な隈取を施す豪傑役俳優。中国戯劇家協会会員/中国演出家協会会員/桜美林大学/多摩美術大学客員講師。

得意演目:「三国志」の曹操 張飛/「水滸伝」の魯智深/「霸王別姫」の霸王など。

■9月よりNHKラジオ講座初級中国語で、毎回ゲスト出演。

【'わんりい' お料理交流会】

アイディアの餡が生きる **〈手作り月餅の会〉**

9月23日は旧暦の中秋。いろいろな餡を詰めた話題性のある美味しい月餅が手づくりできます。!昨年、何媛媛さんに教えていただいた本格的月餅を復習してみましよう!今回は、小豆餡、ナッツ餡、ナツメ餡の三種類を作ります。

9月9日(木) 13:00～16:00(予定)

於: 町田中央公民館・料理室

- 原町田6-8-1・町田センタービル(109ビル)
- JR横浜線町田駅・ルミネ口徒歩3分
- 小田急線町田駅南口徒歩5分

▲参加費: 1000円 ▲定員: 先着15名

●持ち物: エプロン 筆記用具

●申込み&問合せ: ☎042-734-5100 'わんりい'

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



全員集合!! 第12回町田発国際ボランティア祭

2010夢広場 ～この星に平和と希望を～

10月31日(日) 10:00～16:00

於: まちの駅「ぽっぽ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結!エスニック料理いっぱい!民族芸能いっぱい!そして、エスニックグッズもいっぱいのお縁日!世界を体中で味わおう!

'わんりい'の会は、炭火でジワリと焼いた香ばしい、遊牧民風味のエスニック焼鶏を販売します。ご都合つく皆さん、是非お出掛けして焼きたてを賞味してください!!

- 主催: 2010夢広場実行委員会
- 共催: (財)町田市文化・国際交流財団
- 問合せ: 町田国際交流センター
☎042-722-4260

平成22年度文化庁芸術祭主催公演

オーケストラを通して体感するアジアの豊かな個性!

アジアを繋ぐ

〈アジア オーケストラ ウィーク 2010〉

東京会場: 東京オペラシティコンサートホール・大ホール

- 10月2日(土) 18:00/廈門フィルハーモニー管弦楽団(中国)
- 10月3日(日) 14:00/トルコ国立大統領交響楽団(トルコ)
- 10月4日(月) 19:00/光州交響楽団(韓国)

大阪会場: ザ・シンフォニーホール(大阪)

- 10月5日(火) 19:00/光州交響楽団(韓国)

チケット(全席指定・税込)

- ▲各1回券 S=3,000円 A=2,000円 B=1,000円
- ▲東京3公演セット券 S=7,000円 A=5,000円
- ▲同一公演S席2枚ペア券 5,000円

★問合せ: 日本オーケストラ連盟 03-5610-7275

- 演奏曲目など詳細は、
<http://www.orchestra.or.jp/aow2010/>

liáng sī chéng

人類文化遺産保護の先駆者—**梁思成**(展覧会)

2010年8月20日(金)～9月10日(金)(土・日休館)

10:30～17:30無料

於: 東京中国文化センター

港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F
日比谷線「神谷町」駅4番出口より徒歩約5分
銀座線「虎ノ門」駅2番出口より徒歩約7分

- 主催: 中華社会文化発展基金会、梁思成銅像日本奈良建立組織委員会、東京中国文化センター
- 後援: 中国駐日大使館、奈良県、(社)日中友好協会

世界的な建築歴史学者、建築教育家並びに建築家・梁思成は、数多くの中国古代建築や文化遺産の保護にあたりと共に清華大学建築学部建築学科を設立、生徒の育成にも力を注いだ。中国が誇る梁思成のその足跡をたどる。

★問合せ 東京中国文化センター

☎: 03-6402-8168 Fax:03-6402-8169
E-Mail: ccctok@hotmail.com